

日本を代表するライフセーバー

クイーンズランド州ゴールドコーストでライフセーバーとしての活動経験を持ち、現在は消防士として活躍するほか、日本国内外の競技会で好成績を収めている本多辰也選手にライフセービングについてお話を伺いました。



本多辰也 (30歳)

所属クラブ：東京消防庁ライフセービングクラブ、今井浜ライフセービングクラブ
主な成績：RESCUE2004 世界大会ビーチリレー銅メダル
2006年全豪選手権ビーチフラッグス3位
2007年全豪選手権大会出場種目：ビーチフラッグス、ビーチスプリント

本多選手がライフセービングを始められたきっかけを教えてください。

——高校まではラグビーを続けていましたが、大学でライフセービングクラブの新入生合宿に参加してみたところ、すごく興味を惹かれる内容で、また先輩や同期のメンバーがとても魅力的な人たちであったため、自分もやってみようと思いました。

今年で活動12年目を迎えられますが、今までで一番印象に残っている出来事は何ですか？ また辛かったことは何ですか？

——一番というよりは、毎年夏の海水浴場で監視活動を無事故で終わることができた時の達成感や充実感です。辛かったことは大学3年生の頃、夏の監視期間中に食中毒で入院したことです(笑)。

ライフセーバーとして普段から心掛けていることを教えてください。

——自分はずっとライフセーバーである、ということを実感することです。ライフセーバーとして必要な技術、知識を習得することに終わりはありませんし、また、ライフセービングという素晴らしい活動をみんなに知ってもらえるように、色々な人との出会いを大切にすることも心掛けています。

ライフセービングにおいて、日本とオーストラリアで違いを感じることはどこですか？ また、今後の日本のライフセービングに期待することは？

——豪州では海水浴に来る人たちが海でのルールをよく知っていて、一人一人がライフセーバーのような印象を受けました。またこの海に行ってもライフセービングクラブがあり、地元の人や子

ども達がライフセービングと触れ合う環境が根付いていると強く感じました。日本のライフセービングでも、誰もがライフセービングの活動に参加できる環境を作り、子ども達の中から多くのライフセーバーが誕生するようになればいいと思います。まずは今回の全豪選手権を通して、日本人の方達にライフセービングのことを知ってもらえたらすごく嬉しく思います。

今年で7年連続の全豪選手権出場となりますが、この大会の印象についてお聞かせください。

——大会の規模、参加者数、レベル、どれをとっても世界一の大会だと思っています。7年前初めて参加したときの感動と興奮を今でも忘れられず、毎年この大会で結果を残せるように頑張っています。全豪選手権という大会があるからこそ、自分自身のモチベーションを高められると言ってもいいほどやりがいのある大会です。

今大会に向けての意気込みを教えてください。

——過去、日本人選手が代表チームとして全豪選手権に参加したことはありません。個人としても、日本チーム団体としても結果を残すことはもちろんですが、何よりも本場豪州のライフセーバーに日本のライフセービングをアピールする絶好の機会だと思っています。私も今回キャプテンとして、全員で協力して日本チームの素晴らしいパフォーマンスを見せられるように頑張っていきたいと思っています。

本多選手にとって、ライフセービングとは何ですか？

——ライフセービングは無数の可能性のあるものだと思います。「競技のナンバーワンはレスキューのナンバーワン」という言葉がありますが、早く正確にレスキューできるように努力することに終わりはないと思います。いくつになってもできる活動、それがライフセービングです。私自身生涯活動として、その無限の可能性にこれからもチャレンジしていきたいと思っています。

本誌の読者にメッセージをお願いします。

——選手、監督、スタッフ全員で日本代表としての誇りを胸に頑張りますので、ぜひ大会に足を運んでください。日本人のみならず、この大会をきっかけにぜひ資格を取って一緒にライフセービングをやりましょう。みなさんとライフセービング活動ができることを日本選手団一同強く望んでいます。ビーチで私たちを見かけたら気軽に声をかけてくださいね。スカボロビーチで皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。



2006年全豪選手権で外国人選手と競う本多選手(ビーチフラッグス)